

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スペイン語の関係節内の叙法選択の基準と意味について：

「特定性」と「主張」の概念と、関係節内の叙法選択を左右する諸要因

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Miyake, Haruko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1480

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



スペイン語の関係節内の叙法選択の基準と意味について 「特定性」と「主張」の概念と、関係節内の叙法選択を左右する諸要因

三宅陽子

この博士論文ではスペイン語の関係節における叙法選択について6つの章を設けて考察する。取り扱う主な問題は、この統語環境において「特定性」、「主張」という概念がどの程度有効であるかということと、各叙法が関係節に用いられた場合が表す意味についてと、その他の要因によって叙法が選ばれる現象の取り扱いについての点である。

第1章では、これまでの関係節内の叙法選択に関する研究および本論文の目的について論じる。スペイン語では主節および従属節において、動詞は直説法、接続法、命令法のいずれかが用いられ、関係節内では直説法か接続法が選択される。関係節内の叙法選択は、しばしば「特定性」という基準によって行われると言われてきた。例えば Porto Dapena (1991)らは「特定性」の概念を用い、関係節の叙法選択が話者からみて先行詞の指示対象が存在するか否か(特定のものか否か)で決まると説く。一方、Pérez Saldanya (1999)らは、関係節内の叙法選択は、「特定性」「存在性」「指示性」といった概念も用いながら、主に「主張」の概念を使って、話者の「主張」の有無によって決まると説く。

先行詞が話者の特定の対象とみなす事柄であるにもかかわらず、後続する関係節に接続法が用いられている場合や、特定であるとは言い切れない先行詞に対して関係節内に直説法が用いられている場合があるため、この「特定性」という概念がすべての関係節において影響しているとは言えない。

本論文では、Pérez Saldanya の理解を基にして、関係節の「主張」の概念というものを、先行詞の指す対象が実在するか否かに対して話者の確信の度合いというものが関係節の叙法選択に影響し決定するとする。直説法は先行詞の指示対象が存在するという確信があるため、関係節の命題は事実であると主張する叙法、一方、接続法はその指示対象が存在するという確信が弱まり、関係節の命題が事実かどうかは不明で、はっきりと主張することを避ける叙法であると定義する。また先行詞の指示対象が不特定な場合以外に、先行詞が特定でありながら、後に続く関係節内において接続法を用いることもある。これは、関係節で示す内容に情報としての重要性を持たせないためや、話者の先行詞に対する否定的なニュアンスを表すための接続法であるとする。従って、関係節内の叙法選択は、先行詞の指す対象が特定であるか否かによってのみ決定される訳ではなく、話者が関係節をもちいて表す内容をはっきりと主張するか控えるかによって決定されると考えられる。

第2章では、「特定性」と「主張」の概念の妥当性について検討する。電子コーパスから事例を集めて、「特定性」と「主張」のどちらの傾向が見られるかについて調べる。第2章

の電子コーパス調査から確認できたことは、多くの関係節の用例において「特定性」の概念に基づいて叙法選択がなされていることである。続いてスペイン語話者にインフォーマント調査を行い、「特定性」の概念が関係節の叙法選択において重要な役割をもたらしていることを確認する。さらに特定の先行詞であるにもかかわらず、後続する関係節内において接続法を用いるジャーナリズム用法を例にとり、「特定性」の概念のみでなく「主張」の概念が大きく影響していることについても論じる。

第3章では、関係節が使用される文脈について分析し、また各叙法が表す意味についての下位分類を行う。電子コーパスより事例を集めて調べ、事実をそのまま述べる場合や、話し手と聞き手にとって明らかな内容である場合に関係節内に直説法が用いられるということを示す一方で、話者の「願望」を表したり、「仮定」の内容を示したり、「後時」である場合などに接続法が用いられるということを示す。ここでは主に、先行詞の指す対象が話者にとって特定であるか否かによって関係節の叙法選択がなされる用例を基に論じていく。

第4章では、最上級および *primero*、*último*、*único* など最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に現れ、先行詞は特定であるにもかかわらず、後続する関係節において接続法を用いる用例について考察する。一般に、最上級構文で接続法が用いられるのは、誇張した文語的な文体、仮言的な言い方だと言われている。

この構文で接続法を用いることによって、話者は先行詞について「信じがたい」という否定的なニュアンスが与えられ、また聞き手の注意を喚起させ、結果として主観や誇張した表現となると考えられる。先行詞の指す対象が明らかである場合には、後続する関係節において直説法を用いるが、接続法を用いることも可能であることが第4章のインフォーマント調査から明らかとなった。ここであえて接続法を用いる理由は、先行詞として機能する語を話者が目にするまで、他にそのようなものを見たことがなかったという意味合いを付加するためであると考えられる。また接続法を選択することによって、関係節の内容を事実であると主張することを避け、先行詞が表すものと同等の他のものについても示唆することで、より多くのものと比べても、関係節の先行詞の程度が一番であるということを表すことができるとする。さらに話者が先行詞の指す対象を目にするまで他にないという意味を表すために、*no* が付かない *nunca* や *jamás* などの否定極性辞を関係節内に付加することがあるということと、この *no* が付かない *nunca* や *jamás* を付加することで否定的な意味合いがより強くなり接続法を選択する可能性もやや上がるということについて明らかにする。

第5章では、先行詞に後続する関係節内の叙法選択と疑惑の副詞(*quizá(s)*など)の関係について考察した。疑惑の副詞が関係節に現れる場合も、先行詞の指示対象に対する話者の

確信が高ければ主張の叙法である直説法を用い、その一方で確信が低ければ、主張を控えようとする叙法である接続法を用いる。先行詞の指す対象が話者にとって明らかに不特定である場合には、接続法を用いて表すことができるが、疑惑の副詞を用いることによって疑義を抱いているという意味合いを補足すると考えられる。

第6章では、第1章から第5章まで考察した関係節内の叙法の働きを次のようにまとめて本論文の結論とする。

話者が先行詞の指す対象が存在することに確信が持てる場合や、関係節が示す内容を重要な情報として発話する場合、関係節内では主張を表す叙法である直説法が選択される。その一方で、話者にとって先行詞の指す対象が存在するか否か不明であるため確信が持てない場合や、後続する関係節が示す内容は特定できるが、そこに情報としての価値を置かない場合、話者の関係節が表す内容の主張を控えようとする叙法の接続法が選択される。つまり先行詞の指す対象は実在するかどうか、また実現するか否かによって叙法選択が決定されることが多いため、「特定性」という概念が関係節の叙法選択に概ね有効である。

しかし、関係節のジャーナリズム用法で接続法が用いられる場合や、最上級および最上級と同様、先行詞の内容を唯一的に限定する語が先行詞に用いられる場合のように、特定の先行詞を指すにもかかわらず、後続する関係節の中で接続法を用いることも可能である。この関係節内の接続法は、話者の先行詞が指す対象が特定ではないために用いられているのではなく、関係節の表す内容に情報としての価値をあまり与えないということによるものであると考えることができる。

先行詞の指す対象が特定か不特定かによって叙法選択がなされる場合と、特定の先行詞にもかかわらず、後続の関係節内において接続法が選択される場合に共通して言えることは、話者が関係節の命題に対してはっきりと主張するか控えるかによって叙法選択が決定されることである。

参考文献

- Pérez Saldanya, Manuel (1999) “El modo en las subordinadas relativas y adverbiales”, *Gramática descriptiva de la lengua española*, I. Bosque y V. Demonte, dirs, Capítulo 50, Espasa Calpe, Madrid.
- Porto Dapena, J. Álvaro (1991) *Del indicativo al subjuntivo: valores y usos de los modos*, Arco/Libros, Madrid.